

Brinton, Laurel J. and Elizabeth Closs
Traugott: *Lexicalization and
Language Change*

Cambridge: Cambridge University Press, 2005. xii + 207 pp.

石崎保明

1. はじめに

伝統的に語彙化 (lexicalization) は複合語化や品詞転換といった通常の語形成のプロセスを指すことが多かったが、近年では特に文法化における一方向性仮説の試金石として注目を浴びている。^{*} しかしながら、文法化との関連で議論される「語彙化」は、その言語学における用語としての汎用性の高さから、様々な解釈の下で研究が進められているというのが現状である。例えば、文法化の“反対”のプロセスは一般に「脱文法化 (degrammaticalization)」とよばれているが、「語彙 (lexicon)」を「文法 (grammar)」の対極にある概念と捉えて、語彙化を脱文法化と同一視する研究も存在する (e.g. Ramat (1992))。本書の目的は、先行研究の検討を通して語彙化の概念規定を明示し、語彙化と語形成とは同一の言語現象ではないこと、および語彙化と文法化が、いくつかの共通性を含むものの、概念的に独立した言語変化であることを示すことである。

2. 本書の概要

1章では語彙化と文法化およびそれらを構成する概念が、2章では語形成に

において語彙化とみなされてきた事例がそれぞれ紹介され、続く3章とともに先行研究の詳細なレビューを構成している。1-2章での議論で本書の提案との関連で特に重要な意味を持つ概念は「構成性の消失」, 「生産性 (productivity)」, 「漸進性 (gradualness)」である。構成性の消失を示す現象には、形態的融合 (fusion), 音声的合併 (coalescence), 意味的脱動機付け (demotivation), そして意味の漂白 (bleaching) がある。「生産性」とは、「話者が新規に複数の言語表現を結びつける言語の特性 (p. 16)」であり、ある範疇や表現の生起数を表す頻度 (frequency) とは異なる (例えば現代英語の *-ment* は頻度が高いが生産性は低い)。「漸進性」は、通時的変化の過程で過渡的な状況が存在することを指し、共時的観点からの言語表現の連続性を表す「段階性 (gradience)」とは区別される。

3章は語彙化と(脱)文法化の関係について述べられている。語彙化を脱文法化 (= 文法化の反対のプロセス) と同一視する分析に対して、語彙化も一方的に音韻的合併や意味的動機付けの消失を伴う点では文法化と同じであること (Lehmann (2002)), 文法化の反例として示されている語彙化の事例 (例えば品詞転換) には漸進性を伴わないこと (Haspelmath (2004)) を理由に、語彙化と脱文法化は同義ではなく、語彙化の反対のプロセスは実際には民間語源であると主張する。

本書での提案は4章に示される。語彙化を単に「レキシコンへの採用」と定義すると、“レキシコン”に採用される要素が語彙的・文法的の如何、あるいは変化が急進的・漸進的の如何に関わらず“語彙化”されたことになり(広義の語彙化)、レキシコンに採用される要素が語彙的なものである場合(狭義の語彙化)と文法的なものである場合(文法化)の違い、およびレキシコン内での要素の生産性の違いを捉えることができない。そこで、本書では広義の語彙化を「目録 (inventory) への採用」とし、語彙化を狭義の「レキシコンへ採用」と仮定する。さらに、文法化と同様、語彙化は言語使用においてのみ、そして文脈においてのみ漸進的に生じる通時的なプロセスであるとされ、語彙化と文法化をそれぞれ(1)と(2)のように定義する。

(1) Lexicalization is the change whereby in certain linguistic contexts speakers use a

syntactic construction or word formation as a new contentful form with formal and semantic properties that are not completely derivable or predictable from the constituents of the construction or the word formation pattern. Over time there may be further loss of internal constituency and the item may become more lexical. (p. 96)

- (2) Grammaticalization is the change whereby in certain linguistic contexts speakers use parts of a construction with a grammatical function. Over time the resulting grammatical item may become more grammatical by acquiring more grammatical functions and expanding its host-classes. (p. 99)

定義上、語彙化も文法化もともに一方方向のプロセスであり、音韻的合併と意味的動機付けが消失する点でも共通するが、語彙化とは異なり、文法化は形態的融合を必ずしも必要としない。また、語彙化には文法化に典型的にみられる脱範疇化や意味の漂白、生産性や頻度の増加、主観化といった現象が見られない点で文法化とは決定的に異なる。

語彙性と文法性の通時的プロセスは図1に示される。図1内のLとGはそれぞれ語彙性と文法性を表し、数字が増すに従い目録内でその要素における変化の度合いが進行したことを表している。

語形成の中でも構成性の消失を伴わない、自由な結合関係に基づくものは長期記憶を伴う（つまり話者による学習を要する）目録とは独立したレベルで処理がなされているため、語彙化の事例とはみなされない。しかしながら、定義上、同じく語形成の結果生まれた言語表現であっても、漸進的な構成性の消失

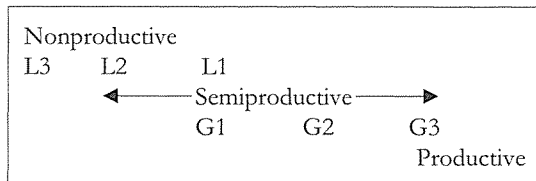


図1：語彙性と文法性の変異に沿った通時的変化
(p. 102 Table 4. 3)

を伴うものについては語彙化の事例となり得る。

5章は事例研究である。以下、本書の枠組みで語彙化と分析される事例を中心に見ていく。

英語現在分詞の形容詞的用法 (e.g. *entertaining puppets*) は、古英語期 (OE) において派生接辞 *un-* と共起する例があるなど、この頃すでに動詞用法とともに形容詞的用法も持ち合わせていたが、OE の屈折語尾 *-ende* の生産性がもとより限定的であったという点で、図 1 における L2 の段階であったと考えられる。中英語期 (ME) 後期から初期近代英語期 (EModE) 以降生産性が減少し、心理動詞にのみその使用が制限られるようになった等の理由から、現在分詞の形容詞的用法を語彙化 (具体的には L2 → L3) の事例と分析している。

複数語動詞 (multi-word verbs) のうち句動詞 (e.g. *take away, break up*) と前置詞付き動詞 (e.g. *look after*) は、ともにある程度慣用化されている点では同じであるが、前者が OE の「動詞 + (空間を描写する英語本来の) 副詞的不変化詞」を起源に持ち、ME までに不変化詞が相的意味を獲得した文法化の事例 (G1 程度) であるのに対して、後者は、OE の接頭辞付き動詞の消失とはほぼ同時に唐突に英語史に現れることから、その各々の事例においてその程度差はあるものの、接頭辞を伴う動詞の語順変化により機能上再配置された語彙化の事例 (L1 → L3) であると分析する。

複雑述語 (composite predicates) について、例えば ME 後期に現れた *have a try* のような軽動詞を含むものは、その事例の生産性の高さや軽動詞の相的な機能から文法化の事例 (G1) とし、*lose sight of* などの事例はその生産性の低さから語彙化の事例 (L1) であると分析している。

その他、*-ly* 副詞や談話標識は一見すると語彙化の事例にみえるが、実際にはともに文法化の事例 (前者は G2 → G3, 後者は G2 レベル) であるとしている。

6 節では、6.1 節で全体の要約がなされ、6.2 節では言語変化の研究一般において今後配慮されるべき記述上の課題が示されている。

3. 議論

本書では一方向の中心的な基準の1つを従来の範疇の変化（e.g. 開いた類⇔閉じた類）から生産性の変化と捉えなおしている。その上で、本書では文法化ほど一貫していない（p. 145）としながらも、語彙化においても一方向性の傾向を認め、かつ漸進性を伴う通時的プロセスであると仮定している。しかしながら、文法化と同様に語彙化もまた漸進性をもつ一方向性のプロセスであるということが、単なる現象なのか、何らかの動機付けをもつものなのかについて、本書では明らかにされていない。文法化における漸進性に関しては、本書およびその中で検討されている先行研究以外にも例えば認知言語学における用法基盤モデル（Usage-Based Model）があり、それによれば、ある言語表現の頻度の高まりが抽象度の高いスキーマの定着をもたらし、その結果としてその言語表現の生産性を高めると分析される（Langacker (2000)）。この用法基盤モデルでは、頻度の増加の観点から文法化における漸進性を捉えることが可能であるが、頻度の増加を伴わない語彙化の漸進性については捉えることができず、（変化の動機付けが存在するとするならば）別の説明が必要となる。

また、変化の結果としての言語要素が語彙的なものであるのか文法的なものであるのかは、それほど明確に区別することができるのかという問題もある。例えば、本書では具体的な考察はないが、複合前置詞は語彙化の事例とみることも、その機能上の変化から文法化の事例と見することもできる（秋元 (2000)）。語彙的・文法的の区別が明確なものでないとすると、本書が主張する語彙化と文法化の違いは、結局のところ、生産性の違いに還元されかねない。

4. おわりに

本書は、膨大な言語資料とその詳細な分析を背景に、これまで文法化現象の“反例”として扱われてきたものを語彙化の事例として文法化現象から切り離すことによって文法化における記述上の問題を解消し、今後、さらに説明力のある文法化理論の構築へと研究が進むことを意図して書かれたものとみること

ができる。その意味で、本書の題目は「語彙化と言語変化」となっているが、実際には「文法化」に特に関心のある者に向けて発信された研究書であると考えられる。

*本稿をまとめるにあたって貴重なコメントをいただいた匿名の『IVY』編集委員に感謝申し上げます。

参考文献

- 秋元実治 2000. 文法化とイディオム化 東京. ひつじ書房.
- Haspelmath, Martin. 2004. On Directionality in Language Change with Particular Reference to Grammaticalization. In *Up and Down the Cline — The Nature of Grammaticalization* (Typological Studies in Language, 59), ed. by Olga Fisher, Muriel Norde, and Harry Perridon 17-44. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 2000. A Dynamic Usage-Based Model. In *Usage-Based Models of Language*, ed. by Michael Barlow and Suzanne Kemmer 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- Lehmann, Christian. 2002. New Reflections on Grammaticalization and Lexicalization. In *New Reflections on Grammaticalization*, ed. by Ilse Wischer and Gabriel Diewald, 1-18. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins. John Benjamins.
- Ramat, Paolo. 1992. Thoughts on Grammaticalization. *Linguistics* 30: 549-560.